



自らを励ます力

校長 山田 勇一郎

夏を迎え、田んぼの稲もぐんぐんと空に向かって伸びています。水泳指導も始まり、プールから水のはじける音が響いてきます。水泳は、水に親しみながら泳ぎを楽しむ場と同時に、子供たちがそれぞれに自分自身と向き合い、目標達成や課題克服を目指す場でもあります。子供たちの中には「できないからいやだ」「やりたくない」「水が冷たい、こわい」「着替えがめんどろ」といったネガティブな気持ちをもつ子供もいます。

このような子供に対して、「できないのは気持ち足りないからだ。」と強引に向き合わせる根性論的な指導がまかり通った時代もありました。思い返せば、私がテニス部だった高校時代、水を飲む休憩は限られ、とにかく走る、辛ければ気合い、根性を出せと言われていました。こういったいわゆる昭和的根性論は、日本社会全体で見直しが繰り返し行われてきました。科学的・医学的根拠のない理論を押し付けたり、人の思いが尊重されない言動によって一方的に押しえつけたりする根性論、これは否定されてしかるべきでしょう。しかしながら、根性論の本質的な要素である困難に立ち向かう強い姿勢は今も大切なことだと考えます。ただ、今と昭和の時代の大きな違いは、自ら困難に向き合う方法を、自ら考えて実行するかどうかだと思います。自ら困難に向き合う方法を、自ら見つけ出すのは大人であっても難しいことです。人それぞれ資質・能力が違いますし、人間性も違いますので、こんな方法がよいと一概には言うことはできません。

6月、体力テストを実施しましたが、ある下学年の子供が、50m走に取り組む前に浮かない顔をして「50m走かあ。」とつぶやいたので聞いたところ「走るの苦手でいやなんです。」と答えました。私は、「がんばってね。」とだけ言ってその場を後にしましたが、これからまだ「シャトルラン」という持久走もあるのでどうにかしてあげたいなと思い、後日、6年生の何人かにシャトルランが苦手な下級生にどんな声をかけてあげたらいいか尋ねたところ「がんばった分、給食がおいしくなるよ。」「汗かいた分、お水もおいしくなるよ。」「他の人と比べくらべないで、去年の自分を超越することを目指せばいいんだよ。」と教えてくれました。それをそのまま嫌がっていた子に伝えてみたところ、「勇気が出ました。なんかがんばれそうな気がしてきました。」と笑顔で話してくれました。もし、この励まされた子供が、今後違う場面で自らを自らで励まし、困難に向き合うことができれば、一つ困難に立ち向かう方法を身に付けたこととなります。諦める、避けるその前に、自分で自分を励まして、強い心でたくましく立ち向かえる篠五の子供たちを育てていきたいと思ひます。